

## 小さな園の物語

間藤  
侑

あるところに、とつても小さな幼稚園がありまし  
た。三、四、五歳児合わせてもやつと四十八人、年  
長児などは男児三人女児五人の、たつた八人しかい

人ずつ入った彼らの方が、一番のびのびと夏祭りを楽しんでいる様子に先生たちは本当に驚かされます。

ません。先生たちの悩みは、自然環境にも乏しく思  
うような経験もなかなかさせてやれないことでした。  
た。しかし、年長児だけ、園児百五十人ほどの姉妹  
園と合同の夏祭り大会に参加した時、先生たちの不  
安をよそに、姉妹園の年長児の八つのグループに一  
節式の室内用の鉄棒でちょっとしたトラブルに出  
会ついました。身長の違う年長児と年少児が鉄棒  
の高低でもめています。そこに通りかかった年長の  
先生が、「小さい子にゆずつてやりなさい」と言つ

て行ってしまいます。ところが、すぐその後に年少の先生がやつて来て「もり組さんの言うこと聞くのよ」と言つてやはり向こうへ行ってしまいます。

ちょっととした寸劇です。ほとんど時間を置かないで、二人の先生が全く反対の指導をしたまま行つてしまつたのです。（ちょうど他の園から見学に来ていた先生が、さてどうするかと興味しんしん眺めていました。）さて皆さんなら、或いは皆さんのが園児なら、どうするでしょうか。

見学の先生は『うちの園の年長児ならきっと先生がそう言つたと年少児を追い払うだろうし、年少児なら先生に言い付けに行くだろう』と考えました。しかしこの園の子どもたちは、どちらの方法も

とりませんでした。ちょっと相談をしていたかと思うと、年長児の一人が、大きな積み木を一個持つて来ました。年少児用の台にするのです。一々身長に合わせて調節する必要はありません。子どもたちは見事に自分たちの力で問題（トラブルと、先生の置

いて行つた矛盾というかなり難しい課題）を解決したのです。

先生たちは、のびのびと自由な保育を目指してはいたものの、常々環境に一番頭を痛めていた時に、特に新しい教育要領が「環境を通しての教育」を大きく掲げていることもあって、自分たちの保育には、どう見ても自分の園の八人組の方がずっと堂々としていたし、見学の先生からは、トラブルを解決する力の育ちを羨ましがられるし、一体どうしてこうなっているのか、今度は逆の意味で戸惑つてしましました。

このエピソードは、幼児教育の本質に関わる少なくとも二つの重要な示唆を含んでいるように思われます。先ず第一は、幼児教育における望ましい経験とは何かということについてです。この園の児童たちは、「〇〇したことがある」という意味の経験はも

しかすると多くなかったかもしません。しかし、

しないでしょうか。

いろいろな機会に自分たちの力を試してみるとこと、みんなで協力しあうこと、一人ひとりの考え方や活動が大事にされることなどの経験が、どの子も充分に保証されていたのではないかと推測されます。その経験が一人ひとりの自信ある行動や自分たちで問題を解決できる力を育てたのだと考えることができます。

私たちは、ともすると、「あれもした」「これも見た」「そこも行った」というように確かめられ数え挙げられる外側の経験だけにとらわれて、つい子どもたちの心にとって最も大切な経験は何かということを忘れがちです。その結果、個々の発達の課題を大切になどと言しながら、結局は、例えば「自分勝手な行動をする」「友達の中に入つて行かれない」子は、友達経験を多くさせてやればよいというような、短絡的な発想から抜け出せないでいるように思われます。このエピソードは、そのことを教えては

次に、ではこの園のどんな状況が、子どもたちを育てる大切な経験を生み出したのでしょうか。おそらくそれは、環境としての先生たちの在り様ではないだろかと思います。園児の多い園では、どうしても学年や学級単位でまとまるようになってしまいます。園児は自分のクラスの先生だけが頼りで、その先生との関係がうまく結べないと、なかなか自己発揮できません。先生たちもまた、自分のクラスの保育に追われて他の方に心が向きません。目には見えないこうしたことが意外に大きく作用し、どちらかといふと閉鎖的排他的な、人間的に小粒の子を作っていく危険が無いとは言ひ切れません。

しかし、こんな小さな園では、先生も子どももクラスなどにこだわっていたら何も出来ません。ごく自然に、実質的に三人の先生が四十八人の子どもを教育するという態勢になつたのです。ここで特に強調されることは、大人三人のチームワークの良さで

す。この結果、園は、クラス単位より優位の子どもたちとそれを取り巻く大人たちという、二つの集団構造となります。子どもたちは大人たちに見守られ、安心して自己発揮の経験を積み重ねていったのに違ひありません。夫婦が愛情と信頼で結ばれ、また親として、子どもたちをも信頼して落ち着いた対応をしている家庭の子どもは、自信をもち意欲的でしかも他者受容的な性格に育つと言われますが、幼稚園や保育園も全く同じだと言えるでしょう。

一昔前の時代、子どもたちの世界と大人たちの社会は、ある意味ではつきりと分けられていました。子どもたちは、大人社会から少し距離を置いて暖かく見守られ、その分また厳しくしつけられていたと言えます。大人たちと子どもたちの間には相互信頼が結ばれ、子どもたちは安心していたずらや冒険や異年齢を貫く遊びができ、それを通じてたくさんもの学ぶことができたのです。考えてみると、こ

れは幼児教育のあるべき姿と何と重なりあうことでしょう。そのことがやはり大切だったのだということを、この園の先生と子どもたちは思い出させてくれました。先生たち、どうぞ自信を持つてください。

(新潟大学)

